



## 「日本ITU協会賞選考委員長の6年間」

早稲田大学総長 白井 かつひこ 克彦



今日は、たくさんの方にお集まりいただき、ありがとうございます。

私は、2001年から今年までの6年間、日本ITU協会賞の選考委員長を務めさせていただきました。そのような縁で、本日お話をさせていただくことになったものと思います。

御紹介をしてくださりました富永教授は、私の1年先輩ですが、標準化の仕事では、MPEGで御一緒させていただいてから今日まで、長いお付き合いをさせていただいております。私の専門分野は音声認識、音声合成、自然言語処理、最近ではヒューマンインターフェースですが、富永さんは、交換の仕事から、画像処理、マルチメディア、最近ではネットワークセキュリティであり、二人の仕事は表裏一体のようなものです。

### 無限に広がる情報通信技術の可能性

我々が若かったころ、計算機が非常に貴重だった時代、富永さんと一緒に学内のリモートステーションの整備という仕事をしました。当時、遠くから計算機に電話線でつなぐシステムの伝送速度は、300ボーでした。そのうち、それが1200ボーになって「ずいぶん革命的だ」などと言っていましたが、あの当時は今のような高速伝送ができるとはとても思えませんでした。最近では、ケータイへの動画配信というすごい技術ができたわけですが、このようなことは私がMPEGをやっている頃でさえ想像できませんでした。

大変革命的なことで、こういう技術がもっと早くできていれば、私ももっと良い研究ができたんじゃないかなと思いますが、当時はこんなに圧縮ができるとか、多重化ができるとか、高速のものができるとか、本当に想像もできませんでした。技術というのは革命的なことがいろいろ起こるものだという感じがいたします。

MPEGが始まったころ、CDが世の中に出てきました。これにも私は非常に感激しました。「誤り訂正」という符号が現実に使われること自体が実にうれしくて、本当に感激したものです。そのころはオーディオの会などで感想めいた話をさせていただいていたのですが、歌手や演奏家と消費者を個々につなぐようなサービスがいずれ可能になるのではない

か、そういうものがごく当たり前になるのではないかというように話をしていたことを思い出します。今やまさにiPodなどが出現したわけで、もっともっと個別のサービスと言いますか、人と人、供給者と消費者の関係が個別的になっていくのではないかという思いがいたします。これからは、まだまだいろいろなことが起こることでしょう。

音の分野にしてもそうだし、映像を作る分野でもそうです。私の研究室などでも、学生たちは自分の好きなテーマを研究できるというので、サッカーを取り上げて、サッカーの映像をどのように作っていくかという研究をしている学生たちもいますが、それを見ていると、技術というのはまだまだいくらでもやることがあると思います。その結果、人と人がいろいろな形でつながっていく時代が来るだろうと考えています。

サッカーを例にとってみれば、サッカーは世界のスポーツだから、スポーツというものが世界中の人をつなぐものに貢献していくのではないか。その中で情報通信技術が大きな役割を果たすのではないか。既に放送というものを介してそうになっていますが、更にもっともっと大きく発達していくだろう。まだまだ未来の可能性というものがあるのではないかと考えています。

### 国際的に大きな役割を果たせる 日本ITU協会

MPEGのときに経験したのですが、いわゆるデファクトスタンダードができて、その後それが大きくなっていった、そういう動きの中にあってITUというものの存在価値は社会的に大きな意味を持ってきたのではないかと思います。確かに、国際連合を例にとっても、国際機関は安全保障理事会など、存在意義を含め難しい局面に直面しています。

同じようにITUも、存在そのものや標準化における役割、技術支援、南北問題等々、いろいろな経験をしてきたわけですが、これからの地球社会を作っていくためにはどのような形で役に立っていくのかということが課題であり、内海事務総局長もそのような目的でWSISという大きな働きをされたのだと思います。

このITUという国際的な組織が、これまでの標準化活動と



いうものから大きく飛躍して、社会のセキュリティとか、様々なインフラを強固なものにしていくという方向に進むことは必要なことです。政治まで絡むのかどうかよくわかりませんが、少なくとも行政というものは大きくかかわって活動していくことになると思います。そういう時にこの日本ITU協会がどのようにかかわっていくのか、これが私には楽しみでもあるし、また、そういう飛躍がなければいけないとも思うのです。

私が子供のころに使われていた音声のための電話回線が、世界各国の回線とつながってある程度品質を保証できるものになった。そのための標準化ということこれまでたくさんやってきたのですが、そういうものとは全く異なる、それぞれの国の、あるいは地域のシステム、あるいは社会そのものがある種の整合性をもって安全に共存し得るような状況を作る。そのための情報インフラというのはどういうものなのか。あるいは、我々の社会というものはどういう接点とか構造を持たなければいけないのか。その中を、情報が行き来するわけですが、その情報が行き来するところが極めて重要です。もちろん、どんな情報が行き来させるのが重要であるということなのですが、インフラの中でその中身と構造が非常に密接な関係を持ってきていて、それが社会の安全とか発展というものと大きくかかわっているのだということを痛感いたします。このような状況を踏まえて、これからの日本ITU協会の活動というものを、是非考えていただきたいと思っています。

### 若い人の力を結集して 日本のITU活動の更なる発展を

ここには若い人はあまりたくさんいませんが、標準化ということで、これまでは若い通信・放送機器メーカーの方たちが技術面で参加されていたわけです。しかし、これからは違います。広く行政に携わる多くの方がITU活動に日本からも参加していくことが必要だと思います。行政にかかわる問題を日本から盛んに発信していくことによって、他の国からもそういう方々がたくさん参加してくるのではないのでしょうか。

国連の安全保障理事会というのは極めて重要な役割を担っていますが、非常に直接的な問題が多いと思います。テポドン問題をどうするのか等を議論する場所です。それに対して社会の基礎を作るITUの活動は、これから重要性を増し

てくると考えています。今後、社会の基礎をどのように作っていけばよいかの大きな点です。

そのために、今日お集まりの皆様には、それぞれの組織からITU活動に若い人を参加させて、ITUをどういう方向に向かわせるかという議論をリードしてってもらいたい。そういう希望と期待の両方を、せっかくの場をいただきましたから、述べさせていただきます。世界貢献への一つの大きな道具として、ITUを我々も使っていきたいと思います。せっかく内海事務総局長があれだけの成果を挙げてくださったのですから、この業績を大事に育てていければと思っています。

私自身は、標準化については今申し上げたようなことだけですが、6年間、若い、あるいはシニアのふさわしい方にそれなりの賞を差し上げることができたのではないかと考えています。私の仕事として、満足しております。6年間いろいろな方にたくさんお世話になりました。ありがとうございました。

### 〔質疑応答〕

質問：この会場に来る前にいろいろな方から言われたのですが、今日総長が来られるそうだが、早稲田は一体どうなっているのかという話がありました。これは避けて通るわけにいかないの（笑）、大変聞きにくい話ではありますが、皆さん大変関心が強いということもありますので、二つだけお聞きしたいと思います。

まず昨今の新聞をにぎわしている問題に関して、現在は沈静化していると思いますが、その経緯を簡単にお願いします。

もう一つは、6年前にITUの内海事務総局長と早稲田大学は協力の覚書に調印をしておりますが、大学としてITU大学院構想についてどのように考えておられるのでしょうか。

白井：趣味と実益を兼ねたような二つの質問でございますが（笑）。

### 不正疑惑問題について

一つ目の問題は、皆様御承知のとおり、大変高名な総合学術会議の議員も務めていた大変優秀な方についてです。

今回、不正使用と言われていますが、1999年から2004年まで続いていた振興助成費が中心です。大学における研究



は、多くの場合、何人かがグループになってお金の使い方などを相談しますから、不正使用というのは起こりにくいのですが、今回は一つの研究室の中だけである程度自由にできたというところに、大きな問題があったと思います。

したがって、我々としては、今後研究室の中でのお金の使い方、回し方というものについても、大学自身がもっとコミットしないとイケないと考えています。これは研究者にとっては窮屈になりますが、これをしっかりやっておかないと逆に気の毒なことが起こってしまうことになると思います。

教授に言わせれば、私は一文たりとも自分のために使っているのではなく、研究のために最大限研究費を有効に使ってきたので、どうしてここまで言われなくてはいけないのかというように始めは思ったようです。ただ、不適切な使用であることは間違いありませんでした。不正には違いないけれど、それは、文部科学省の定めている使い方になっていないということです。

いずれにしても、早稲田大学としてはそういうことを起こす環境にあったということだけは認めざるを得ないので、私もそれなりの責任があると思っています。これから名誉回復ということで頑張りたいと思っています。

## 本庄早稲田で進めていくITUとの協力活動

もう一つ、ITUと協定を結んで、本庄を中心にしながらいろいろなプロジェクトを立ち上げています。正直言ってあまり円滑に立ち上がってきませんでした。

一つには、場所の問題がありました。本庄と言うのは山でして、非常に美しい所です。ただ、あそこにはオオタカという鳥が住み着いておりまして、そのために工事が思うようにできないという事情もあります。ICTは、社会全般の問題ですから、我々も幅広く取り組んでいかなければならないと思っています。ITUと一緒にやる仕事も、そういう広い視野で全学的に取り組んでいくつもりですし、引き続きいろいろな形で協力できればと思っています。

本庄では、総務省の御協力も得て、映像系を中心に施設を造りつつあるところですよ。映画なども作っています。今度封切られる「日本沈没」という映画もそこで編集されたものです。また、留学生もずいぶん集まっていますし、環境エネルギーの大学院も設置されました。そんな状況でぼちぼち伸びてきておりますので、本庄の土地へも何かの機会がありましたら、いろいろ応援していただければと思っています。

(7月25日第349回ITUクラブ例会より)



ITUクラブで講演される早稲田大学白井総長